

シリーズ「遺跡を学ぶ」

133

縄文漆工芸の アトリエ

押出遺跡

水戸部秀樹

新泉社



縄文漆工芸の アトリエ

― 押出遺跡 ―

水戸部秀樹

【目次】

第1章 低湿地の縄文遺跡……………4

- 1 大谷地と白竜湖……………4
- 2 押出遺跡とは……………9
- 3 大発見の数々……………12

第2章 盛土の謎……………23

- 1 平地住居の集落？……………23
- 2 平地住居への疑問……………28
- 3 住居はあったのか……………34
- 4 盛土はなんだったのか……………36

第3章 彩漆土器の世界……………43

- 1 彩漆土器とは何か？……………43
- 2 あらたな発見……………46

第4章 作業場の光景……………62

- 3 さまざまな漆製品……………51
- 4 漆職人が行きかう里……………57

- 1 土器による煮炊きと縄文クッキー……………62
- 2 さまざまな石器……………69
- 3 木製品からみえてくるもの……………74
- 4 編布と縄……………79

第5章 押出集落の全体像……………82

- 1 自然環境の復元……………82
- 2 住居はどこに……………84
- 3 押出集落の全体像……………88

- 参考文献……………92

編集委員

勅使河原彰（代表）

小野 昭

小野 正敏

石川日出志

小澤 毅

佐々木憲一

装 幀 新谷雅宣
本文図版 松澤利絵

第1章 低湿地の縄文遺跡

1 大谷地と白竜湖

やわらかな秋の陽ざしのなか、稲刈りも残すところあとわずかのようだ。無数の稲株が残された田んぼは、三キロ先の山まで広がっている。やがて冬が訪れると一面深い雪におおわれ、分け入ることも難しい。それもここでは当たり前前の風景だ(図1)。

ここは^{おおやち}大谷地とよばれる非常に軟弱な低湿地である。灌漑排水設備が整えられたことよって、通常の水田と変わらない景色が広がっているが、かつては腰まで泥に浸かって田植えをし、移動は舟を用いなければならぬほどの湿地であった。あまりに軟弱なために地盤が沈下してしまい、毎年冬になると土を運び入れて水田を維持しなければならないほどだったという。

もともと大谷地一帯は、後期中新世(約一〇〇〇〜五〇〇万年前)に起きた地殻変動によって陥没した場所であり、その規模は東西・南北ともに一〇キロ、深さ一キロと推測されている



田植え。地盤が軟弱なため、腰まで泥に浸かるところもあり、たいへん苦勞して米をつくったようだ。



谷地舟による堆肥運び。移動や運搬には谷地舟とよばれる舟を使用した。水路が大谷地内に張りめぐらされ、農道としての役割をはたしていた。

図1・大谷地の現在とかつての農作業風景

かつての湿地も地盤改良によって広大な水田地帯へと変わったが、相変わらず地盤は軟弱である。大型トラックが脇の国道を通過すると遠くまで揺れる。内部に立つ電柱も傾いているものが多い。

(図2)。陥没地は、北側と東側の山々と、西側の吉野川と南側の屋代川が形成した自然堤防にかこまれていたために、内部からの排水が滞る状態であった。また大谷地内に流れ込む粘土、砂礫が少なかつたことから、湿地性の植物が生い茂り、その遺体が埋没して泥炭地が形成されたと考えられている。植物遺体を微生物が分解する前に、ふたたび植物が生えてくるために年々堆積していくのである(図3)。

現在、大谷地に残る湖沼は北端部にある白竜湖^{はくりゅうこ}だけで、いくつか存在していたほかの湖沼は、すでに水田へと姿を変えてしまっている。白竜湖は大谷地の古い景観を唯一残している湖であり、縄文時代の自然環境を復元するうえでも参考になる。白竜湖周辺の植生は寒地性、高地性のものが多く、一般に海拔一〇〇メートル以上の高層湿原に似ているというが、実際は海拔二一〇メートル付近であるため、きわめて特異な植生だという。そのため「白竜湖泥炭形成植物群落」として白竜湖とその周辺が県指定

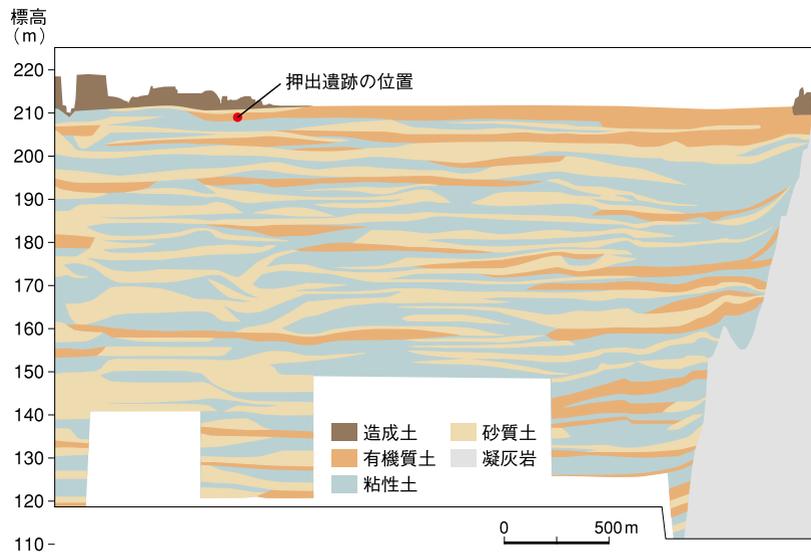


図3 ● 大谷地の想定土層断面図 (右端が大谷地北端)
大谷地の中央部を縦断する断面図で、大谷地全域にわたって土層がほぼ水平に堆積している様子が理解できる。東日本高速道路株式会社が高速道路建設前におこなったボーリング調査による図。

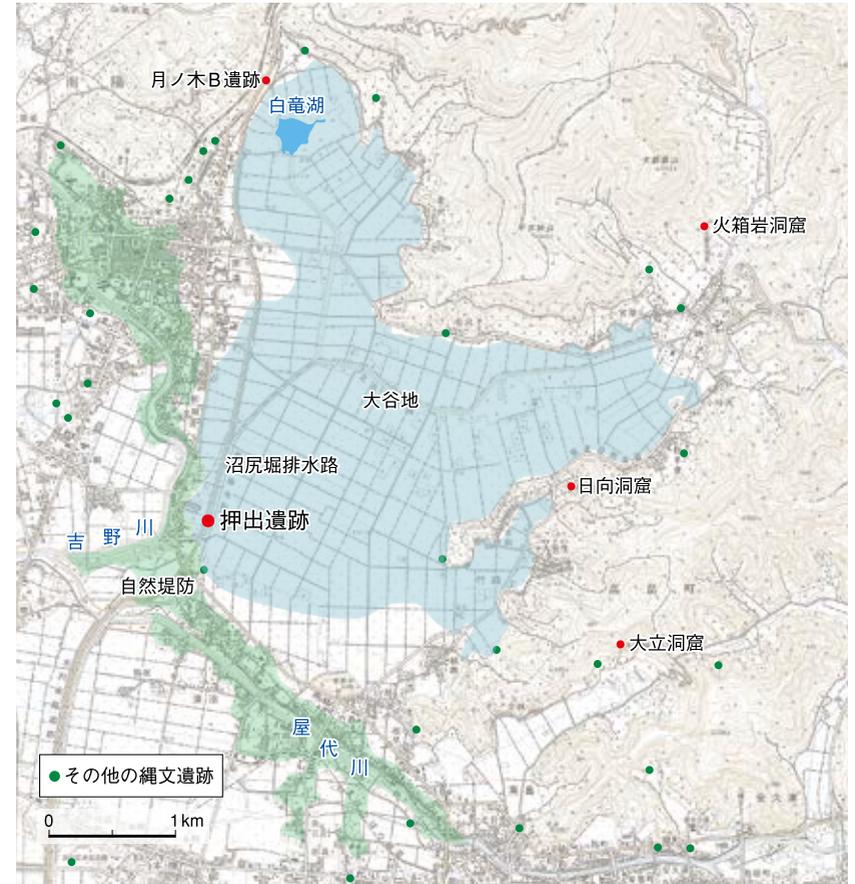


図2 ● 大谷地と押出遺跡
大谷地は山地と自然堤防にかこまれている。大谷地の内部でみつかった遺跡はいまのところ押出遺跡のみである。

文化財（天然記念物）に指定され、その保全が図られている。

筆者も何度か白竜湖に訪れ、泥炭地を歩いたことがある（図4）。湖岸は植物遺体でできており、その上を歩くとまるで水を含んだスポンジを踏むような感触だった。足を下ろすたびに水が絞りだされる音がする。

ヨシなどの湿地性の植物が湖をかこみ、湖面は風にあおられることはあっても、静かに水をたたえている。水は濁りも少なく、透明度も高そうだ。大谷地全体をみても地表の高低差はわずかであり、排水路の流れも緩やかだ。排水路を抜けた水は、西側の吉野川に注がれ、さらに最上川へと至る。湖岸に堆積した植物遺体によって、湖が徐々に縮小しており、いずれ消失しかねないといわれている。湿地性の植物が繁茂した湿原にいくつかの湖沼が点在し、それらが流路でつながっていた、というのが縄文時代のこの地の景観だっただろう。



図4・白竜湖南岸（南西から）
周囲には湿地性の植物が生い茂り、なんらかの施設や護岸のためのものとみられる無数の杭が打ち込まれている。岸は植物遺体でできており、非常に軟弱で水を含んだスポンジのようである。

2 押出遺跡とは

縄文遺跡の地

この大谷地の南西の末端部に押出遺跡^{おんだし}がある（図2参照）。北東に大谷地がひろがり、西と南には吉野川と屋代川がつくった自然堤防がある。縄文時代前期後半（約五八〇〇年前）にいとなまれた大規模な集落跡といわれ、地下約二・五メートルの深さに存在する。

周辺の地下水位は地表面とほぼ同等であり、豊富な地下水によって酸素が供給されにくい。植物などの有機物の分解が進みにくいという特徴がある。そのため台地上の遺跡では出土することが少ない有機質遺物が数多く残されていた。彩漆土器^{さいしつ}をはじめとした漆塗製品や木製品、当時の加工食品である縄文クッキーなどの貴重な遺物が数多く出土した遺跡として全国的にも著名である。また、盛土^{もりど}を築いて湿地を積極的に利用した集落であることも、ほかに例をみない独自のものといわれた。盛土とは土砂を積みあげて築いた野球場のマウンドのような施設で、形は円や楕円などで、規模は三〜一五メートル、高さは数十センチ程度である。

押出遺跡は、山形県南部を占める米沢盆地の北東部に位置する高畠町^{たかばた}にある。高畠町の西半部は平地で、東半部は奥羽山脈に連なる山地が宮城県に接している。稲作のほかに果樹の栽培も盛んで、さくらんぼ、洋梨、ぶどうなどが特産品である。また、松茸の産地でもあり、山地を走る広域農道は「ぶどう・松茸ライン」と名づけられたほどだ。

高畠町の山地西縁には、縄文時代草創期の遺物が出土したことで知られている国指定史跡の